

最上川 氾濫と治水

山形県を流れる最上川は、「母なる川」として流域に暮らす人々にさまざまな恵みを与えてきた一方、江戸時代には7年に1回の割合で氾濫（洪水）を繰り返してきた「暴れ川」でした。河口港として発展し、周辺に庄内平野が広がる酒田は、河道を変え田畑を飲み込む大洪水に何度も見舞われてきました。

本企画展では、関係者並びに関係諸機関より協力いただき、江戸時代の洪水や治水工事について記された古文書や絵図、明治以降に酒田港の近代港湾化とともに進められた最上川河口改修工事、赤川新川開削に関する記録など、貴重な資料を紹介します。

近年、局地的豪雨による大規模な水害が全国各地で多発しています。山形県も昨年8月に豪雨に襲われ、酒田は大事に至りませんでした。戸沢村などの4町村が「局地激甚災害」に指定される被害を受けています。自然災害の脅威を再認識し、先人たちがどのように水とたたかってきたのかを知る機会になれば幸いです。

データで見る最上川

流路延長	229 km（国内7位）
流域面積	7,040 km ² （国内9位）
水源地	西吾妻山（米沢市）
流域市町村	33市町村（県内35市町村のうち）
下流の支川	京田川、相沢川、立谷沢川

◆ひとつの県のみを流れる川としては国内最長。

◆富士川（静岡県）、球磨川（熊本県）とともに日本三大急流のひとつ。

酒田を襲った洪水

洪水による最上川河道の変化が酒田に与えた影響

最上川は、流域に暮らす人々に豊かな恵みを与えてきた一方、豪雨のたびに、一晩で田畑を飲み込み、河道を大きく変えるような氾濫（洪水）を繰り返してきた。

川南の宮野浦地区で、最上川の河口港として発達してきた酒田の町が、永正元年（1504）頃からおよそ100年をかけて、川北に移転したのも、何度も洪水の被害を受け、河道の変化により船着場としての条件が悪くなったことが大きな原因だった。

江戸時代には7年に1回の割合で洪水が発生し、嘉永5年（1852）には、川南にあった遊摺部村が、川北の現在地に村ごと移転する事態を引き起こしている。

最上川の河道がどのように変化してきたのか、はっきりとは分からないが、庄内藩士で郷土史家の安倍親任の著書『筆濃餘理』^{ふでのあまり}によると、古い時代には大きく蛇行しながら、現在の酒田北港に近い古湊の辺りに流れていたようだ。

『大日本地名辞書』（明治40年、吉田東伍著）にも、はじめは鶴渡川原（現在の亀ヶ崎地区）の東を巡り、酒田の北を流れ、小湊（古湊）で海に流れ込んでいたが、何度も河道を変え、現在の銚子口に流れるようになったと書いてある。

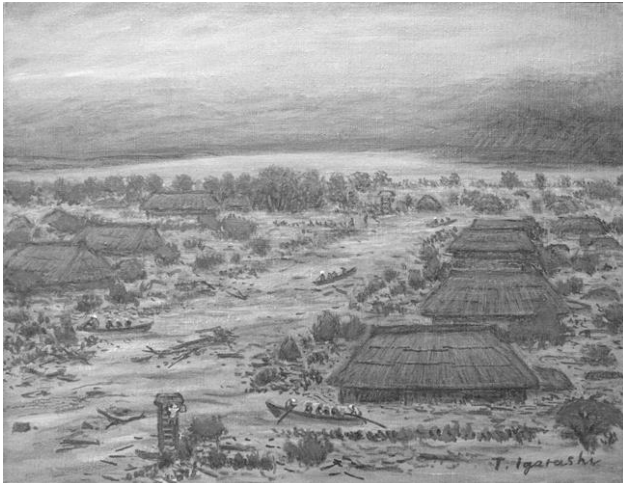
現在、私たちは洪水の不安をほとんど感じることなく生活している。昨年8月の豪雨も幸い大事には至らずに済んだ。それは先人たちが心血を注いで治水事業に取り組み、河道の安定が保たれているからである。かつての最上川は、今からは想像できない姿をしており、町全体を移転させるような洪水を引き起こした「暴れ川」だったことを覚えておきたい。

記録に残る酒田の主な洪水

年号(西暦)	洪水
文正年間 (1466~67)	庄内大洪水。53町歩を流失。川北の浸水7日間に及ぶ。四ツ興野にあった東禅寺城壘も破壊される。白髭水(しらひげみず)洪水という。
慶安 元(1648)	5月15日、大洪水。新井田蔵に浸水し濡米3千俵を出す。
明暦 2(1656)	10月、洪水。本町七丁目から肴蔵まで120メートル川欠け。
万治 元(1658)	庄内大洪水。小牧新田の土手が破れ、酒田城内は二昼夜水浸しとなる。
寛文 5(1665)	茨野新田前の土手が破れ、遊摺部をつく(浸水)。
天和 2(1682)	4月3日、庄内空前の大洪水で、門田村・小牧・茨野新田の土手が破れ、大町・鶴渡川原・牧曾根・漆曾根・酒田町を直撃。酒田七ツ蔵に浸水。3万7千俵の濡米を出す。
貞享 2(1685)	4月、庄内大洪水。川北一帯氾濫。茨野新田の堤防100メートルが破れ、門田村の水門を破る。人馬が多く死ぬ。
宝永 4(1707)	6月上旬から雨が14~15日間に降り続く。亀ヶ崎城蔵米6千俵を濡らす。川北田地浸水多し。最上川河口の川床が隆起し、宮野浦に新川口ができる。
宝暦 3(1753)	7月13日から16日までの雨で、赤川河口が破れる。
宝暦 7(1757)	4月、洪水で亀ヶ崎城内に浸水する。最上川上・中流域の山形・上ノ山・米沢で驚異的な大洪水となり、死者100名を超す。
明和 4(1767)	5月、洪水が門田堤防を破り、酒田城米積込船を押し流す。御米置場(瑞賢蔵)も破壊される。
寛政 4(1792)	日向川、6月16日から17日まで洪水。同じく7月15日から16日まで洪水。
文化 3(1806)	10月24日、大風雨のため最上川が氾濫し、船場町が流される。
文政11(1828)	7月9日に大雨が降り、10日に洪水。赤川の堤防360メートルが決壊し、多くの橋が流失。酒田の松原堤防も破れ、大手橋、新井田橋が大破。鶴渡川原と船場町浸水、今町まで水が上がる。352戸が浸水、御蔵米2万俵が濡れる。最上地方より水死人や家屋多く流れ来る。
天保 4(1833)	6月26日、最上川大洪水。平水より6メートル増水。茨野・小牧村の土手が破れ、亀ヶ崎城の橋が流される。638戸が浸水。濡米4万俵。穀菜九分通り流され飢饉迫る。
万延 元(1860)	12月28日、大雪のところ、暖気による雪どけと降雪で洪水。赤川の被害が多い。酒田御蔵米3万俵浸水。新堀村で6人水死。
明治12(1879)	7月4日から10日まで未曾有(みぞう)の大洪水。水かさ6・3メートル。酒田で一八軒が流され、流域全体で溺死28人、流失家屋439戸。落橋875カ所。河身の破壊・両岸の欠損がひどく、上流より流されてくる土砂のため港が埋まる。
明治38(1905)	8月、最上川氾濫。大宮小野寺堤防が決壊し、大宮・大町・遊摺部は陸の孤島と化す。酒田町も人家の床を浸すこと7、80センチという。
大正 2(1913)	8月27日、最上川洪水。臼ヶ沢・山寺・竹田・飛鳥・砂越・四ツ興野・鶴渡川原地区で氾濫。
昭和19(1944)	7月、最上川大洪水のため上流堤防が決壊し、新堀村などが水害をうける。
昭和22(1947)	4月22日、最上川の出水により背割堤740メートルが決壊する。

年号(西暦)	洪水
昭和30(1955)	6月24日から25日までの鳥海山の総雨量450ミリ。日向川と荒瀬川が氾濫し大水害となる。
昭和44(1969)	8月7日から8日にかけての豪雨により最上川堤防決壊の恐れを生じ、付近の住民71世帯、233人が亀ヶ崎小学校に避難する。
昭和56(1971)	7月16日、庄内に集中豪雨。23カ所で交通が途絶する。がけ崩れで4人死亡。

『酒田市史改訂版』『酒田市史年表改訂版』『最上川河口史』を基に作成



天和2年(1682)の大洪水/五十嵐豊作 画

作者は旧鵜渡川原村生まれ。昭和19年(1944)の最上川洪水の様子を、新堀、新青渡の古老から聞き取り、それと比較しながら、現在の亀ヶ崎4丁目付近を舟で避難する光景を描いた想像図。

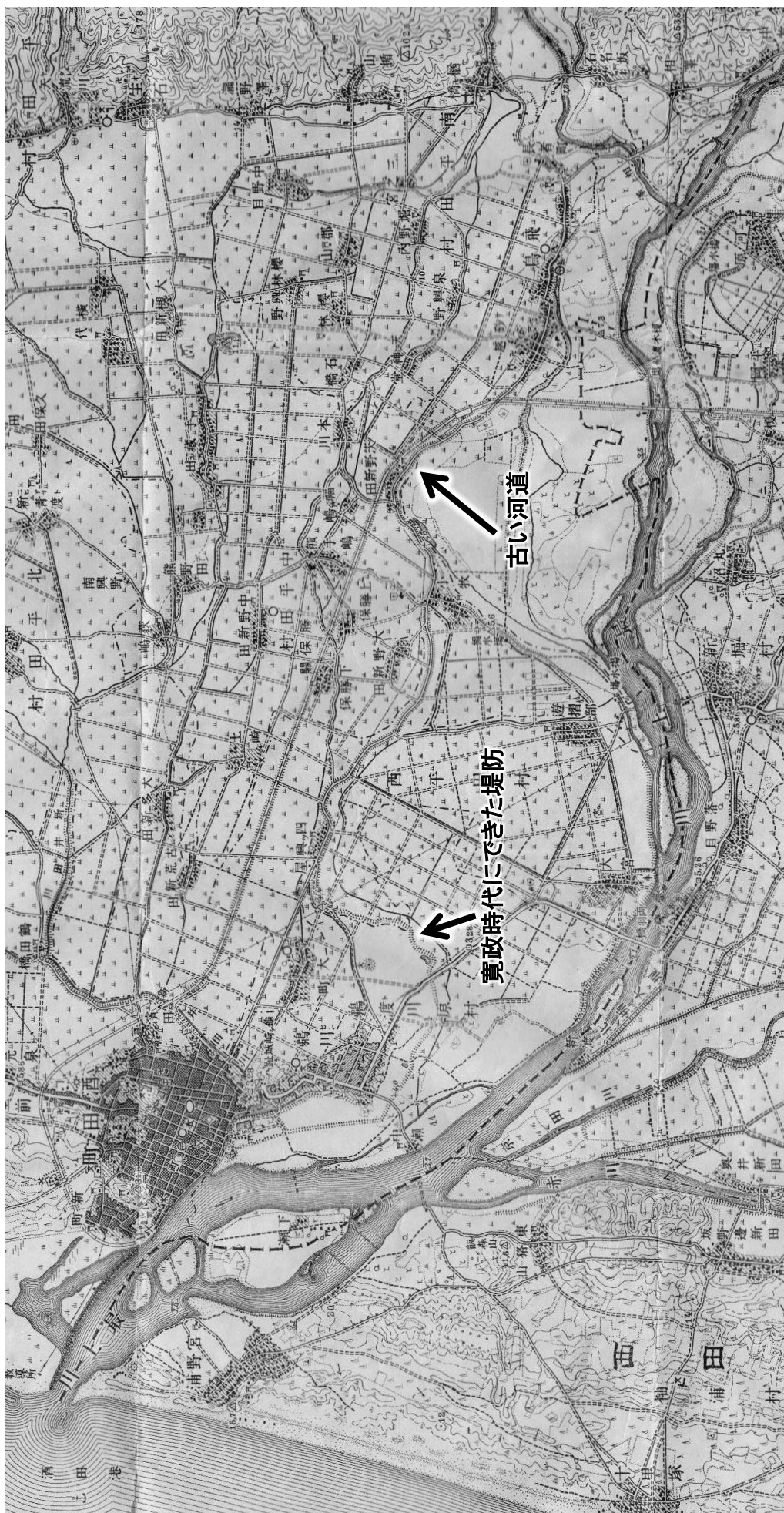


明治38年(1905)の洪水による遊摺部浸水



明治38年(1905)の洪水による大宮小野寺堤防の決壊

五万分之一地形図酒田／大正5年(1916) 古い河道の跡がはっきり分かる。



江戸時代の治水事業

繰り返す洪水との終わらない闘い

江戸時代、7年に1回の割合で発生した最上川の洪水は、川沿いの農村部では田畑を押し流し、酒田では新井田蔵に収めた米を濡らすなど、人々の生活や経済活動に大きな影響を与えた。そのため、大小さまざまな規模の普請（土木工事）による治水対策がひんぱんに講じられていた。

代表的な大規模普請には、慶安3年(1650)と延宝2年(1674)の新川掘削、寛政3年(1791)から始まった国役普請(※)などがある。

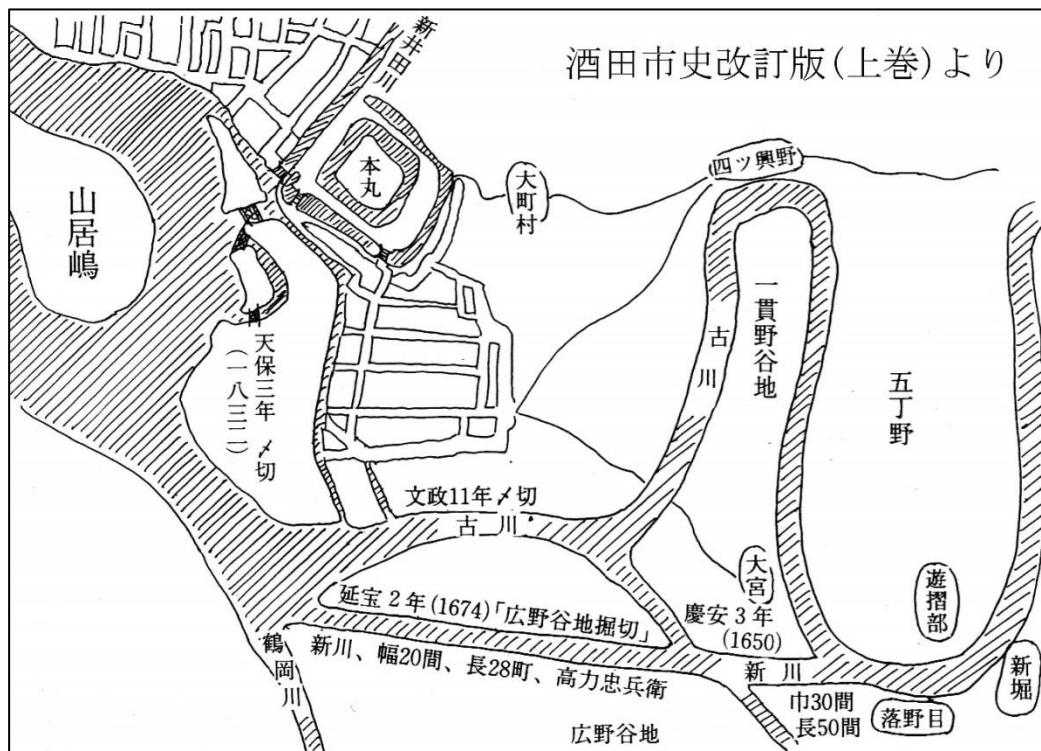
江戸時代の治水は、流域の藩がそれぞれ局部的に取り組んでいたにすぎなかった。新たに川を掘り土手を築く工事、川底の泥をさらう作業などはすべて人力で行われ、工費用資材には木材や竹、石、砂、土などの自然物が使われていた。当然だが、その効果には限界があり、繰り返す洪水との闘いは延々と続いた。現代の私たちには想像が及ばないほど大変な苦労だったであろう。

※国役普請…幕府主導の下、農民から一定の基準で人足などを動員して行われた大規模な河川工事。おもに幕府領・私領の入り組んだ地域で実施された。幕府が費用の10分の1を負担した。

本格的な治水の始まり－慶安、延宝の新川掘削－

最上川下流で最初に行われた本格的な治水工事は、慶安3年(1650)から3年かけて完成させた新川掘削である。工事前の最上川は、落野目から北に折れ、四ツ興野から南に向かう形で大きく蛇行していた。この工事では、落野目から大宮の畑地をまっすぐ東西に通る、幅30間(約55メートル)、長さ50間(約91メートル)の新川を掘った。

さらに寛文10年(1670)、郡代・高力忠兵衛が計画した、広野谷地を通る新川の掘削に着工。延宝2年(1674)に、幅20間(約36メートル)、長さ28町(約3キロメートル)に及ぶ新川を完成させた。「広野谷地堀切」と呼ばれるこの工事には、延べ2万人の百姓が動員されている。



元禄2年(1689)頃の最上川。南北に大きく蛇行して流れる旧最上川の河道(古川)、慶安・延宝の工事によって完成した新川が描かれている。現在は川北に位置する酒田市大宮が、慶安の新川掘削以前は川南になっていたことが分かる。原図は鶴岡市郷土資料館所蔵の「羽州亀崎城侍屋敷並町割絵図」。

飛鳥・砂越に公儀土手を造った寛政の国役普請

寛政元年(1789)、庄内藩は幕府に国役普請を請願した。

最上川の洪水は流域の村々から亀ヶ崎城、酒田町にまで被害を及ぼすこと、280石の天領(幕府領)を含む飛鳥・砂越地区が、堤防の破損により危険な状態に陥っていたことなどが理由だった。

願いは認められ、寛政3年(1791)から大規模な改修工事が始まる。飛鳥・砂越の最上川沿いには延長600間(約1キロメートル)、幅8間(約15メートル)、馬踏(※)4間(約7メートル)の二重の堤防ができ、俗に「公儀土手」と呼ばれた。

ほかに幕府御米置場(瑞賢庫)の修復、上下川原(鶴渡川原)の堤防の修復(造成か?)などが行われている。

※馬踏…堤防の上の人や馬が通行する道路

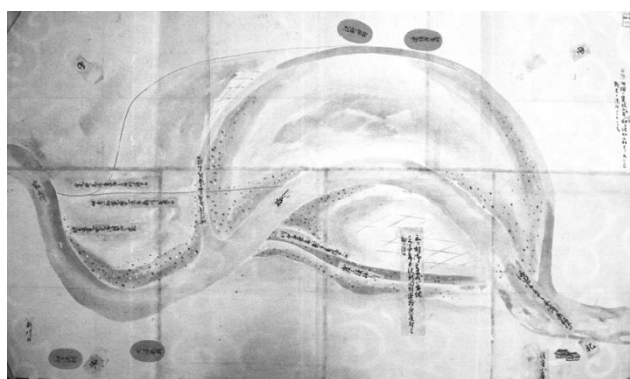


亀ヶ崎上下川原御普請所 天保三年辰九月 河形之図／天保三年(1832)

分流の激しかった河口部の流路を調整するため、寛政8年(1796)に山居谷地の締切工事が、文政11年(1828)に上川原(※1)の締め切り工事、下川原(※2)と山居堤防の修繕が行われた。この工事により、以前は最上川の中にあつた谷地が陸続きとなり、現在の山居町・若竹町・両羽町・堤町・千石町になった。

年代から見て、この絵図は、文政11年に始まった工事の実施場所を描いた川形図と考えられる。

※1 上川原…現在の亀ヶ崎五丁目より南 ※2 下川原…現在の若竹町・千石町・山居町・堤町



臼ヶ沢ほか2村が差し出した願書に添付した最上川絵図／寛政5年(1793)4月

洪水や新川掘削により河道が変わると、土地の形や面積が変わるため、流域の村々が農地の権利を主張して争うことも度々だった。

最上川を挟み、北岸に位置する松山領内の臼ヶ沢村・大沼新田村・小出村、南岸に位置する庄内藩領内の沢新田村・連枝興屋村との間では、畑地の権利を巡って何度もいざこざが起こっている。

寛政4年(1792)、松山領内の3村では、かつて新川掘削によって川南と地続きになった畑地が、最上川の流れが変わり川北の松山領と地続きになったから返してほしいと、松山・庄内両藩に願ひ出ている。

3村の願ひは却下され、その後何度も願ひ出ているが、この争いにはっきりと決着がついたかどうかは分かっていない。

この絵図は、寛政5年4月(1793)に提出した願ひ書に添えられたもの。

近代の治水事業—酒田港修築とともに—

国直轄による大規模な改修工事が実現

明治維新後の混乱期、最上川は無防備な状態に置かれ、洪水による被害が年を追って大きくなっていった。ついに明治12年(1879)には、28人も死者を出した大洪水が発生している。この事態を重く見た山形県は内務省に陳情し、明治17年(1884)に国直轄による最上川・赤川の改修工事の実施が決定する。翌年、監督として技師・石井虎治郎が派遣され、延長約90キロメートル、工費76万余円の大改修に取り組んだ。

石井は、水流をコントロールするために「木工沈床法」と呼ばれる技法を用いた工事を実施。また、酒田港の船着場である船場町下から河口に延びる導水堤(石堤)を築いた。明治36年(1903)、18年に及ぶ工事が完了。洪水被害の軽減とともに目的としていた河川航路の改良が実現し、酒田港近代化の足掛かりを築いた。

改修工事は内務省から山形県に移管され、大正、昭和へと継続されていく。

本格的な最上川治水を手がけ、酒田港の基礎を造る

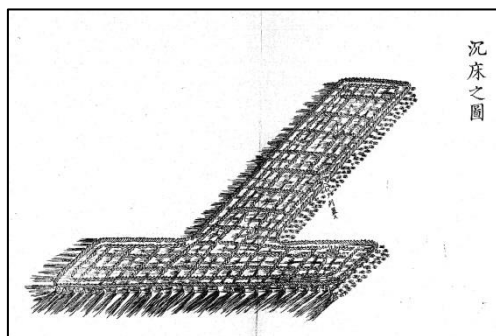
石井 虎治郎 安政3年(1856)―大正5年(1916)

現在の千葉県松戸市の農家に生まれる。子どものころから江戸川の氾濫に心を痛めて、治水に関心を持つようになる。

内務省技師になり、近代的な河川改良技術を身に付けた石井は、石巻湾野蒜港の改築に携わり、明治18年(1885)、29歳で最上川・赤川改修工事のために酒田に着任する。

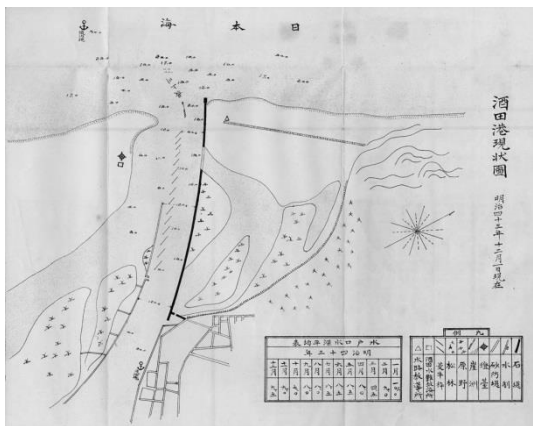
竣工後も酒田を離れず、山形県工手として最上川・赤川の治水に尽力した。

明治34年(1901)、日和山公園に顕彰碑が建立された。



沈床

明治14年(1881)、内務省土木局発行『土木工用録』より／国立国会図書館提供



酒田港現況図／明治43年(1910)

石井虎治郎が築いた酒田港の導水堤(石堤)の形が分かる。

明治35年(1902)、さらなる河口改修の促進を求めて、地元有志が「酒田河口同盟会」を結成する。その後、名前を「最上川河口酒田築港期成同盟会」と変えた同盟会が、明治43年に作成した『酒田築港調査資料』に掲載された図である。

酒田港近代港湾化を目指した河海分離工事

国直轄工事により、酒田港には大型汽船が出入りできるようになったが、次第に土砂の堆積により水深が浅くなり、河口港としての機能が低下していった。さらに明治27年(1894)の庄内地震が酒田の経済に大きな痛手を与えた。経済復興を目指す酒田にとって、酒田港を近代的な商業港湾として整備することが、差し迫った課題となった。

明治35年(1902)、有志が「酒田河口同盟会」を結成し、河口改修促進運動を進めた。同37年(1904)には酒田町が県に最上川河口改築を建議した。その後、逓信大臣・後藤新平や内務省の技師が河口の検分・調査に訪れ、大正6年(1917)、ようやく、抜本的な最上川及び河口港湾の改修工事が決定。同8年(1919)に着工した。

工事は、港に土砂が埋まらないよう、背割堤を築いて最上川と港を切り離す方法がとられた。これは大正6年暮れに酒田港を調査した山形県知事・添田敬一郎の提案が基になっている。工費は150万円。そのうち50万円を酒田町が負担した。

昭和7年(1932)、河海分離工事は完成し、現在の酒田港の基盤が形づくられた。

初代最上川改修事務所長として尽力

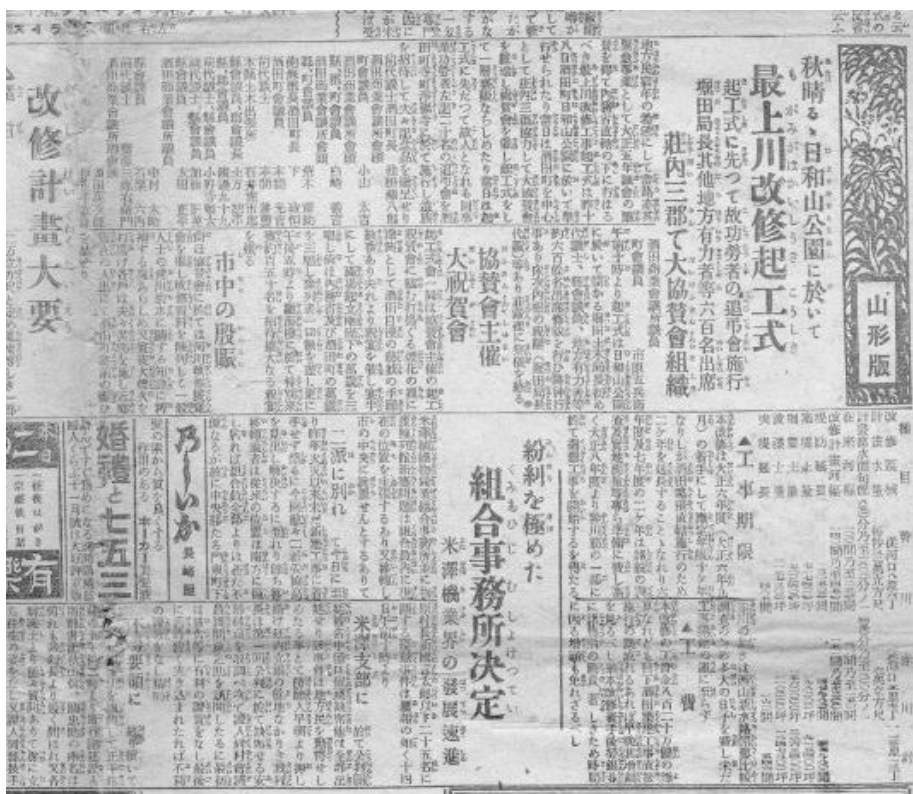
野村年 明治6年(1873)―大正12年(1923)

旧尾張藩士・野村稻守の長男として名古屋生まれ、京都帝国大学工科大学卒業後、内務省の土木監督署技師となる

大正6年(1917)に最上川及び河口港湾の改修工事が決定すると、翌7年に最上川改修事務所の初代事務所長として酒田に着任。酒田港と最上川の分離、赤川を日本海に直接流す新川の掘削という大事業を実現させるため、綿密な調査を行い設計図を完成させた。

しかし大正12年(1923)、河川・港湾の視察のために訪れていたイタリアで自動車事故に遭い、51歳で亡くなった。酒田では、すぐに新聞で訃報が報じられ、妙法寺で告別式が行われている。

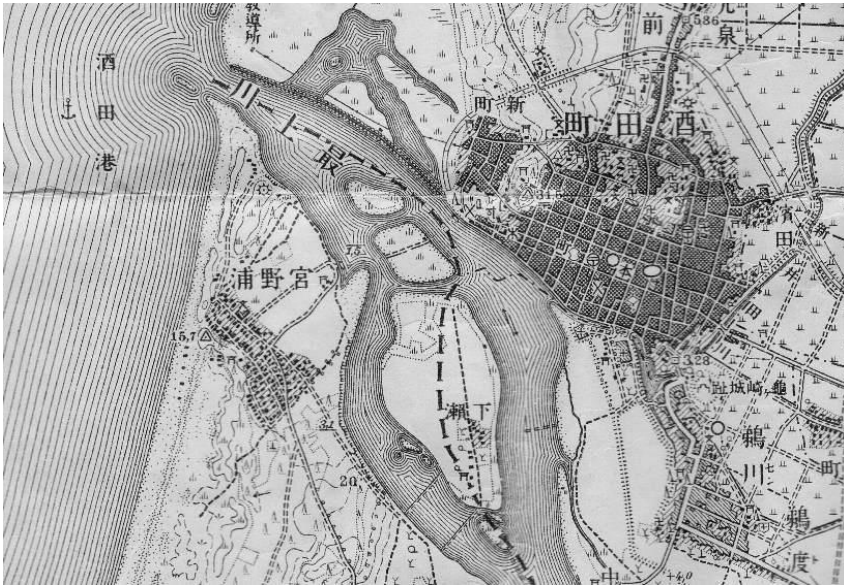
志半ばで不慮の死を遂げた野村の功績を後世に残すため、昭和8年(1933)、光丘文庫長・白崎良弥が『野村年先生遺稿』を出版している。



最上川改修起工式の開催を伝える「報知新聞」大正9年(1920)10月19日

当日は600名が出席し、起工式に先立ち故功労者の追悼会が行われたことなどが書いてある。

地図と写真で見る最上川河口の変化



大正5年(1916)頃
五万分一地形図酒田(部分)



昭和23年(1948)
国土地理院提供写真



平成23年(2011)
国土地理院提供写真

地域民の念願だった赤川と最上川の分離

嘆願・陳情の末に実現した赤川新川掘削

最上川、赤川、京田川の合流点に近い広野村・袖浦村(現酒田市)は、江戸時代から洪水に悩まされ続け、明治に入ると、荒廃した田畑を捨てて北海道に移住する人も出てきた。

広野村では、佐藤文治が中心となって、明治32年(1899)から3年をかけて京田川に堤防を築き、明治37年(1904)には袖浦村と共同で赤川筋に排水溝を造るなどの洪水対策に取り組んでいた。しかし洪水が収まることはなく、本格的な赤川の改修が待ち望まれた。

その後、大正6年(1917)に決定した最上川改修工事の付帯事業として、赤川の拡幅工事が計画されたが、そのために30数軒の家屋が移転、280ヘクタールに及ぶ農地を削減させられることになる。佐藤や袖浦村の久松元祐をはじめとする地元有志は、削減をできる限り縮小してほしいと陳情、嘆願を繰り返したが、受け入れてもらえなかった。

この苦境を救ったのは、秋田県大曲出身の衆議院議員・榊田清兵衛だった。榊田は熱心に政府に対して働きかけ、地元有志も陳情を続け、ようやく大正10年(1921)、計画の変更が決定。地元民にとって、明治時代からの念願だった、新川掘削による日本海への直接放流工事が着手された。新川は昭和2年(1927)に通水し、昭和11年(1936)には護岸工事を終了した。

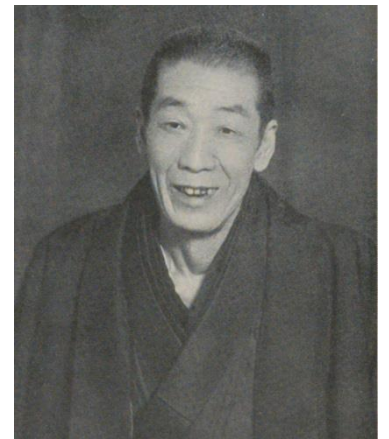
広野・袖浦の農民のために奔走

榊田清兵衛 元治元年(1864)－昭和4年(1929)

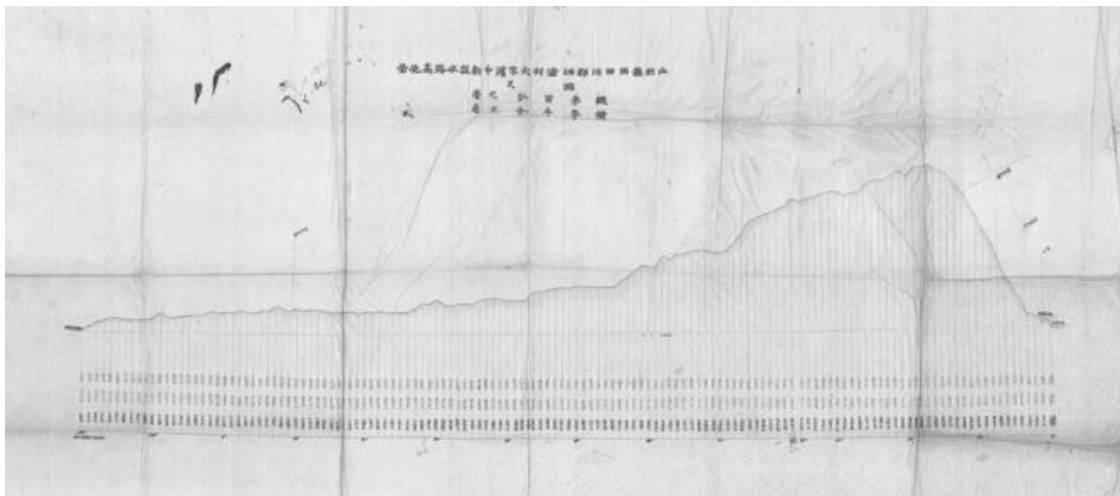
秋田藩大曲村生まれ。明治23年(1890)に県会議員になる。同41年には衆議院議員になり、昭和3年(1928)まで7回連続で当選する。

榊田は国光生命保険の重役も務めており、大正7年(1918)、社用で訪れた庄内で、たまたま同社の鶴岡駐在員・阿部喬から、赤川拡幅工事計画が農民たちを苦しめていることを聞く。この計画には無理があると感じ、工事を新川掘削に変更することが、流域の美田を守り、農民の離散を防ぐための最善策であると考えた榊田は、阿部や地元代表者の久松元祐、佐藤文治らと絶えず連絡をとりながら東奔西走した。

昭和3年(1928)11月、その功績をたたえ、酒田市奥井の三所神社境内に「榊田清兵衛翁碑」が建立された。



写真提供／国立国会図書館



山形県西田川郡袖浦村大字浜中新設水路高低図

新赤川掘削地の縦断面図。最も高い場所の地盤高は25メートルあり、地表面から15メートルも掘削した箇所もある。いかに大変な工事だったかが伝わってくる。



赤川新川掘削工事の様子

左の写真は人力で掘削作業に当たっている時に撮影したものか。右の写真は、後方に掘削用重機エクスカベーターが写っている。線路を設置し、掘り出した土砂を入れたトロッコを馬が引いている。



完成した赤川新川



五万分一地形図酒田(部分)／昭和11年(1936)

赤川新川の護岸工事が完了した昭和11年に発行された。完成した川に「赤川新川」と書かれている。

赤川新川掘削のコーナーで紹介している写真・新聞・図面などの資料は、赤川新川掘削の実現のために尽力した西山掘鑿期成同盟会長・久松元祐氏のご子孫から寄贈いただきました。

洪水は必ず起こる 持ち続けたい防災意識

水害の脅威を再認識させた平成30年8月の豪雨

平成30年8月6日、山形県では活発な前線の影響で、非常に激しい雨が降り、最上川河口の下瀬観測所では氾濫危険水位を超える3.45メートルの水位を記録。これは、ちょうど50年前の昭和44年(1969)8月8日に記録した観測史上最高の3.67メートルに次ぐ水位だった。

さらに8月31日も豪雨となり、下瀬観測所では再び氾濫危険水位を超え、観測史上4位の3.13メートルを記録した。

酒田市では6日、31日とも、最上川に近い地域に避難指示が出されたが、幸い大事には至らなかった。しかし、最上地方の戸沢村などは、激甚災害に指定される被害を受けている。

全国各地で局所的な集中豪雨による洪水被害が相次いでいる今、最上川の河口部に広がる酒田でも、いつ大きな洪水が起こってもおかしくないことを、市民一人ひとりに実感させる出来事だった。日ごろから防災意識を持つように心掛けたい。

平成30年8月5日・6日 酒田市全体の被害の概要

(単位：件)

住 宅	床下浸水	156	計157	
	床上浸水	1		
道 路	国・県・市道	冠水	18	計82
		市 道	法面崩落	
	路肩洗掘		7	
	土砂流入（路面に土砂）		17	
	路面亀裂		1	
	路面洗掘		1	
	法面亀裂		2	
	水路閉塞		3	
	路肩崩落		3	
	農道・林道	冠水	1	
		法面崩落	15	
		路肩崩落	8	
		土砂流入	4	
		路面洗掘	23	
		地滑り	1	
県道・ その他道路	道路崩落	1		
	冠水	3	計10	
路肩崩壊	7			
河 川	護岸・法面崩落	10	計10	
水路等施設	水路・放流口等土砂等流入	13	計25	
	堰堤損傷	6		
	法面崩落	4		
	ゲート・揚水ポンプ等損傷	2		
農 地	冠水・浸水	27	計81	
	土砂流入等	8		
	農地崩壊等	46		
その他			22	
			合計440	

酒田市危機管理課提供資料を基に作成

平成30年8月5日・6日の避難所ごとの避難者数

8月5日

(単位:人)

避難場所	人数
八幡タウンセンター	380
大沢コミセン	90
一條コミセン	180
八幡小学校	104
一條小学校	50
鳥海八幡中学校	97

避難場所	人数
青沢克雪センター	35
南ノ前田自治会館	25
小女房自治会館	1
山元農村交流センター	7
幸楽荘、多機能こうらく等	22
計11施設	991

8月6日

(単位:人)

避難場所	人数
市役所	73
交流ひろば	68
日本海総合病院	202
酒田リハビリテーション病院	80
総合文化センター	3
勤労者福祉センター	3
全農ビル	90
浜田小学校	19
松原小学校	90
第三中学校	40
第四中学校	55
酒田市美術館	40
出羽遊心館	41
亀ヶ崎小学校	81

避難場所	人数
南平田小学校	46
東部中学校	4
宮野浦コミセン	7
琢成コミセン	1
松陵コミセン	7
内郷コミセン	2
南部コミセン	1
余目第二公民館	70
余目第三公民館	230
余目第三小学校	65
ホテルリッチ&ガーデン	2
かんぼの宿	20
老人保健施設シェモア	2
計27施設	1,342

資料提供/酒田市危機管理課



昭和44年(1969)8月7日から8日にかけての豪雨により、最上川河口部の下瀬水位観測所で3.6メートルの水位を記録したことを示す看板。後ろに酒田市営体育館が見える。



出羽大橋の橋脚には水位を示す線が引いてある。